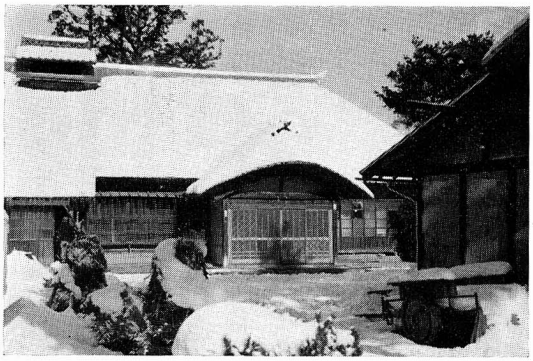
特性は失われていない。昭和三十八年より始められた農業構造改善事業は、この中荒井村付近より手始められ、部落周辺の区画整理事業は、既に殆ど成らんとしているが、基盤にこの氾濫原の中州である砂礫層が横たわっていて、土地の成因を物語っている。

2、部落の発達　現在中荒井村には村役場が建ち、綜合中学校ができて、その他の農業改善事業の諸機関の施設と共に、あわただしく、北会津村の政治・経済・教育万端の中心地たらんとしているかにみえる。しかし、これは偶然に今に至ってそうなったのではない。明治中頃から、東西に主要交通路の走る下荒井村に、旧荒井村・館の内村の中心地があったために、現在しか知らない人々はそう思いこみ易いのに過ぎない。

古くは大沼郡中荒井組、その後会津郡、明治になって北会津郡と変ったが、北会津村の大半は旧中荒井組で、その中心地は中荒井村であった。

近世松平藩になって村長事務、現在では部落長とか区長に相当するものであるが、それを世襲的に代々司っていた役職を肝煎というが、これは現在も続く千葉宅であった。この肝煎の中荒井組内をまとめて、郷頭という役職を置いたことがある。現在の北会津村長という役職程度の世襲的家柄である。これが中荒井村にあった。現在の小森健次宅である。役宅のため乗込みと呼ぶ、籠の横づけできる玄関がついていた。今もそれを補修して、立派な乗込みがついているのはその名残である。



中荒井村旧郷頭宅ののりこみのある家造り
（42.1.8　小森健次宅）